

～障害の知識と理解の促進シリーズ～

# 高次脳機能障害を理解するために 事例集



独立行政法人 高齢・障害者雇用支援機構  
障害者職業総合センター 職業センター

## はじめに

障害者職業総合センター職業センターでは、職業講習における高次脳機能障害者の利用の増加等を受け、平成11年9月から高次脳機能障害者に対する支援技法の開発を目指して、職場復帰支援プログラムを開始しています。

これまで職場復帰支援プログラムにおいては、対象者及び事業主双方への支援ノウハウの蓄積に努め、高次脳機能障害者の職場復帰支援についての体系化を図ってきたところであり、具体的な取り組みの状況については、すでに実践報告書や研究発表等で報告しております。

障害者の職業リハビリテーションを実施する際には、当事者自らが障害について理解し、受容することが大切であり、就職或いは職場復帰する際には、事業主が障害についての知識と理解を持つことも必要となります。

しかしながら、高次脳機能に障害のある方の場合には、医学的リハビリテーション段階において、身体障害についての説明は受けてきており、一定の知識はあるものの、高次脳機能障害が職業場面においてどのように影響するかということについて理解されている方は多くありません。

このような状況から、本事例集においては、これまで職場復帰支援プログラムを利用された方々の協力を得て、職場復帰支援プログラム開始前段階と終了段階における障害の理解状況とその過程について事例を紹介することにより、当事者や家族の障害についての理解促進として、また、高次脳機能障害者の就労を支援する関係者の職業リハビリテーション業務の一助となれば幸いです。

平成16年3月

障害者職業総合センター  
職業センター長 佐藤珠己

# 目 次

I	高次脳機能障害とは	1
II	職業に影響を及ぼす主な高次脳機能障害	2
	1. 記憶障害	
	2. 注意障害	
	3. 遂行機能障害	
III	「障害を理解し受容することについて」	3
IV	事例	
	1. 障害を理解するために	5
	2. 事例の構成について	6
	[事例1] Aさんの場合 (脳血管障害)	7
	[事例2] Bさんの場合 (頭部外傷)	11
	[事例3] Cさんの場合 (頭部外傷)	15
	[事例4] Dさんの場合 (頭部外傷)	18
	[事例5] Eさんの場合 (脳血管障害)	21
	[事例6] Fさんの場合 (脳血管障害)	24
	[事例7] Gさんの場合 (頭部外傷)	27
	[事例8] Hさんの場合 (脳血管障害)	30
V	参考資料	
	1. 補完手段について	
	(1) メモリーノート	33
	(2) 円滑に作業を遂行するための工夫	34
	2. トータルパッケージについて	35

## I 高次脳機能障害とは

高次脳機能障害の用語・定義に関しては、現在研究者や専門家の中でも統一見解がでていませんが、高次脳機能障害とは、病気や事故などの様々な原因で脳が損傷されたために、言語・思考・記憶・行為・注意などの機能（高次脳機能）に障害が起きた状態を指しています。その場合、全ての高次脳機能に障害が現れたり、逆に一つの機能だけに障害が見られるわけではありません。いくつかの機能に障害が見られることが多く、個人によって見られる機能障害の種類やその状態・程度が異なります。

また、高次脳機能障害は、外見からは分かりにくく、本人も自覚しにくいという特徴があります。

## II 職業に影響を及ぼす主な高次脳機能障害

### 1. 記憶障害

記憶障害には、比較的古い記憶は保たれているのに、新しいことを覚えるのが難しくなり、約束の日時や場所を間違えたり、仕事を覚えにくくなったりすること（前行性健忘）と、受障以前に起こった事を思い出せなくなる事（逆行性健忘）があります。

記憶障害の職業への影響は、逆行性健忘であるのか、前行性健忘であるのかによって異なります。

逆行性健忘では、受障までの職業経歴の中で習得した知識や技能を職場復帰後に活かすことが困難になったり、職場の同僚や取引先の方の顔を思い出せず、これまでに築いた職業的な資産を活かすことが出来なくなってしまいます。

前行性健忘があると、予定の管理や新たに仕事の手順を覚えるときなどに困難が生じます。また、一度お金を支払ったにもかかわらず、そのことを忘れてしまい、もう一度支払おうとしたり、物を買ったことを忘れて金銭の出納が合わないと言われるなど、金銭管理に

も影響がでる場合があります。

## 2. 注意障害

注意障害とは、ひとつのことに注意を集中したり、多数の刺激の中から注意して必要なことを選んだりすることが難しくなる障害です。気が散り、疲れやすいため、長い時間仕事に集中することが難しくなることがあります。

一般的に、注意は持続、選択、転換、配分の4種類の機能に分類されます。注意のどの機能が障害されるかによって、その機能が関与する行動に影響が現れます。たとえば、注意の持続に障害があると、作業を始めてからの時間が長くなるにつれて、誤りが多くなったり、作業の中断が生じたりします。注意の転換に障害があると、作業室に人が入ってくるなどのちょっとした刺激で作業が中断することがあります。また、注意の配分に障害があると、同時に二つの作業に気を配ることが困難で、文字の間違いをチェックしながら文意を把握したり、電話を聞きながら、聞いた内容をメモに取ることが困難であったりします。

## 3. 遂行機能障害

遂行機能障害とは、必要な情報を整理して、計画し、処理していく一連の作業（目標を決める→計画する→手順を考える→実施する→結果を確認する）が難しくなる障害です。仕事上の指示を受けた場合に、どのような手順で、与えられた業務を進めて行けばよいか判らなくなり、目的を達成することが難しくなるなど、自己管理することに支障を来したりします。

### Ⅲ 「障害を理解し、受容するという事」について

ある日突然、障害を有するようになるということは、人が生まれ生活していく中で、誰にとっても起こり得ることであるということが言えます。また、職業リハビリテーションの分野において、障害の種類は身体障害、知的障害、精神障害、その他と区分されています。

こうした中で、高次脳機能障害者の場合には、若年から高齢期に至るまで、受障年齢は幅広く分布していますし、脳血管障害（脳出血、脳梗塞、クモ膜下出血）、脳腫瘍等による脳の器質的損傷や交通事故、労働災害などの頭部外傷等、様々な原因により発症するために、身体機能の障害や精神的機能に障害を伴うこともあります。こうしたことから高次脳機能障害は、多様な支援を必要とする障害であり、外見的にも症状が分かり難いこともあり、社会的理解が十分得られていない状況にあります。

特に、中高年者が在職途中で受障した場合、子供の養育費など経済的な問題、介護問題などに突然直面することになります。そのため、本人だけではなく家族についても、社会的に孤立することがないように配慮することが必要になります。このような場合には、身体的要因・神経心理学的要因・心理社会的な要因が複雑に関連しているため、社会参加に向けたアプローチは、包括的に行なうことが望ましいとされています。当事者だけではなく、家族が障害について理解し、併せて、支援者が共通の認識を持ち、各種のリハビリテーション活動に取り組むことが重要となっています。

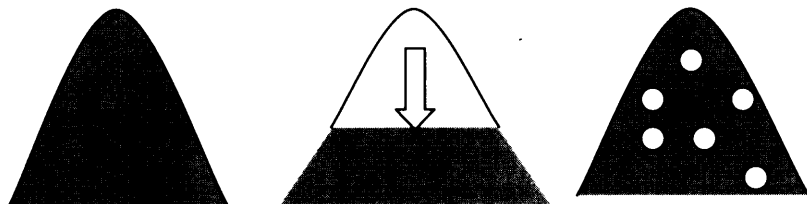
現在、障害者職業総合センター職業センター（以下「職業センター」という。）では、高次脳機能障害者の職業リハビリテーション技法の開発として、就職を希望する障害者の職業前訓練指導としての「職業準備訓練」と、休職している高次脳機能障害者の円滑な職場復帰を目指した「職場復帰支援プログラム（以下「復帰プロ」という。）」に取り組んでいるところであります。いずれの場合にも、利用者は、自分自身の障害について知識をもち、理解するように努めておられますが、

こうした知識や理解がないと支援を受ける側、支援する側双方にとって、リハビリテーションを効果的に実施する上で困難を伴います。

就職を希望する方も、職場復帰を希望する方も、自らが、「職業生活を営む上でどのようなことに支障があるのか」、或いは、「課題を解決するためにどのようにすべきか」ということについて承知しておくことは、職業リハビリテーションを受ける際に大変重要なポイントとなってくるのです。

## IV 事例

### 1. 障害を理解するために



- ①学習や経験により一つの山を築いてきた。
- ②山のある高さまで低くなってしまったというのであれば、またそこから頑張って築き上げていこうと思う。
- ③しかし、障害により、山のところどころに穴があいてしまったため、どのようにしてまた山を築いていったらよいか困っている。

以前復帰プロを受けられた方で上記のような話をされた方がおられました。

この例え話は、高次脳機能障害の状態を、よく言い表していると思います。

その方は、以前と変わらないような専門的な言葉や知識が保たれているのに、日常的な会話がうまく理解できない、小学生が簡単に読めるような文章がずっと読めなくなったというようなことを感じておられました。が、あなたにもそのような経験がありませんか。

私たちは、この事例にヒントを得て、以下に掲げる事例を取りまとめることになりました。同じ障害のある方に専門的な話をするよりも、その方の趣味や興味など関心のある出来事を基に、ご自身の障害について理解することが出来るのではないかと、また、同様の趣味や興味を持っている方にとっては、理解し易いのではないかとこの発想から、広く多くの



方々にご覧いただき、障害を理解するための一助になればと考えています。

## 2. 事例の構成について

ここに掲載している事例は、障害者職業総合センター職業センターで実施した復帰プロを受講された方々の障害理解の状況と、その経過を記載しています。

以下の事例では、おおよそ次のように構成されています。

まず、事例の冒頭に、ご本人が受講後に語ったご自身の障害の認識状況についてご紹介し、その障害を踏まえた補完手段・対処行動を取り入れた訓練について出来るだけ忠実に記載しています。

次に、事例の主な障害状況、当センターで実施した復帰プロの内容を補足し、復帰プロ実施前と実施後の状況から障害理解の変容を理解していただくことができるようになっています。

なお、全ての事例において、作業課題の訓練と書いたものは、トータルパッケージ（Ⅴ 「参考資料」の2.）の種々の作業課題の実施を指しています。

## 【 [事例1] Aさんの場合】

<Aさんのことば>

脳というものはパソコンのハードディスク（以下「HD」とする。）のようなもので、自分の脳は昔のパソコンのようにHDの容量が小さいサイズになってしまった。そのため、一度にたくさんをしようと、パソコンがフリーズするように自分の脳もフリーズしてしまう。

だから、周辺機器である補完手段、メモリーノートをしっかり使いこなさないといけない、メモリーノートは自分の脳の一部です。

### 1. 主な障害状況

身体障害としては、身体障害者手帳6級で、軽度の右半身麻痺がありました。

医療機関において、主な高次脳機能障害は、記憶障害、易疲労性、注意障害、遂行機能障害と診断されていました。

### 2. 復帰プロ利用前の本人の状況

#### (1) 家族から得られた本人の状況

奥様から伺った状況では、場に応じた行動が出来ない、記憶障害から起因するモノ忘れの多さ、どこかに物を置いてくる、何をしたのか覚えていない、と感じられることもあったようです。

#### (2) 本人自身の障害理解の状況

ご本人は、日常生活ではほとんど困っていないため、自覚に乏しい状態でありました。むしろ、「妻が自分のことを子どものように扱うこと、子どもにまでばかにされている気がする」と語っておられました。

### 3. 復帰プロ実施期間中の経過

#### (1) 開始当初

(受障前に職業センターのある)幕張へ行った事があるので、一人で行く事ができると、ご本人は自信をもっておられました。電車の中で棚の上に荷物を置いていたら、そのことを忘れ、荷物をなくしてしまいました。また、幕張に来るまでに乗る電車を間違えて(各停電車→快速電車)、駅を下りたが、道に迷い、違う建物に入ってしまう状況でありました。そのため、自分自身でもかなり記憶に障害があることに強く不安を持った状況から、復帰プロを開始することになりました。

#### (2) 訓練途中

ご自身の障害について、「以前はパソコンのHDのように、自分の脳もすべて取り替えてしまいたい、と思っていた。けれど、それをしてしまうと、自分が自分ではなくなるので・・・」と悩む時期が続きました。

#### (3) 障害の受容を促した出来事

Aさんは、奥様に「自分のことを理解してほしい」、「子ども扱いしないでほしい」という願いが強かったため、訓練の経過を奥様にお伝えする約束が、訓練への意欲向上・維持につながりました。

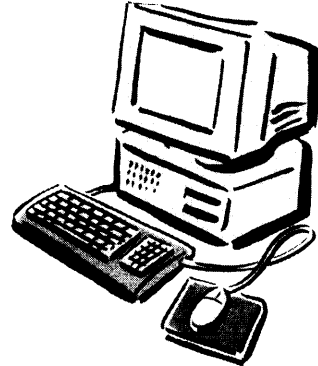
Aさんは、記憶障害がかなり重篤であったため、なかなか作業のミスがなくなる状態が続きましたが、少しずつ時間をかけて改善し、その成果や苦労した過程をAさんと職業センターの障害者職業カウンセラーが奥様に定期的に連絡し、奥様がAさんの障害の困難性とAさんが努力している姿勢について理解を深めて頂けたことが、本人の障害受容を促進した要因でした。

また、一緒に復帰プロを受けていた同じ年代のCさんから、「どうしてなのか考えても仕方ないよ」と明るく励まされたことも、訓練を継続することができ、障害の受容が促進された大きな要因と言えます。

### 4. 職業センターでの訓練終了時点でのAさんの障害受容・理解について

文頭で載せてあるとおり、Aさんはご自分の障害を、パソコンに例えて理解されています。

脳のワーキングメモリー(脳の容量)はパソコンに例えると記憶装置にあたり、Aさんは受障により、ワーキングメモリーがかなり狭くなったと推測された事例です。主記憶装置は、人間の脳にあたる場所ですが、Aさんの場合は、この主記憶装置にあたる場所に、すぐにデータがいっぱいとなり、データをそれ以上記憶できなくなってしまいます。すべての情報を脳に入れておくことが困難であり、さらに覚えた情報は時間が経つと忘れてしまいます。



それを補うための補完手段が、メモリーノートです。これが補助記憶装置にあたり、私たちも、一般的に日常でスケジュール帳やメモなどを補助記憶装置として使っています。

受障前の業務として、パソコン関係で仕事をされていたAさんならではの例えであると言えます。

Aさんのこの言い換えは、パソコンをある程度理解している方にとっては、高次脳機能障害についてとてもわかりやすい表現であり、一度にたくさんのことをできないという障害の現れ方をよく言い表していると思います。

## 5. Aさんの補完手段、対処行動について

Aさんは、記憶障害が顕著なため、まずは、自分の行動記録を残すこと、作業や実際の職務遂行に際しては、手順書通りに行なうことを徹底して訓練を行いました。訓練の工夫として、作業の手順書などは全て1冊のメモリーノートに入れました。いくつかのマニュアルやメモ帳に分けて作成してしまうと、どこになにがあるのか思い出すことが困難であるためです。

また、Aさんは易疲労性が顕著であり、疲労がある一定レベルを超えてしまうと、疲れていること自体を自覚できない傾向にあったため、メモリーノートを活用することにより適度に休憩をとり安定して仕事をできるよう、自律的に行動できるようにしていきました。

作業・仕事をするにあたっては、①毎日作業の開始前には声に出して手順書を読み上げること、②作業の手順書で、手順を一つずつ確認しながら行うこと、③見直しを2回以上行い、見直しをしたらレ点をつけること、④数字・記号・文字の照合作業をする場合には、声に出しながら照合作業を行うことを補完手段・補完行動として徹底しました。

こうして、Aさんは、時間はかかりましたが作業を正確にできるようになりました。

## 【[事例2] Bさんの場合】

< Bさんのことば >

車のCPUが脳にあたり、CPUは少し衝撃を受けるだけでも間違っ  
た判断や誤作動を起こしやすい。CPUにはその誤作動がどうして起き  
るのか分からない。自分の障害は、脳の中のことなので、どうしてなの  
か考えても分からない。

だから、毎日日常点検が重要であるように、自分も常に油断しないよ  
う気をつけて見直しすることが重要。

自分は疲れると、さらに誤作動を起こしやすくなるので、休憩の取り  
方も考えないといけない。

### 1. 主な障害状況

身体機能面は、軽度の右上下肢機能障害で、軽い麻痺があり、身体障害者  
手帳は6級を取得されている。

医療機関で、主な高次脳機能障害は、記憶障害、注意障害、遂行機能障害  
があると説明を受けておられました。

### 2. 復帰プロ利用前の本人の状況

Bさんは、「はっきり言って、自分には障害はない」「右半身麻痺について  
は分かる。すぐに考えがまとまらないこと、記憶力が落ちたことは感じるが、  
正直に言って、日常生活で障害と感じ、困ることはない」「努力して頑張って  
やり続ければ、大丈夫だ」と語っておられました。

### 3. 復帰プロ実施期間中の経過

#### (1) 開始時点

開始当初は、障害者になったことを認めたくない、という思いが強く、復帰プロを受けなくても本当は職場復帰できる、ということを書いておられました。

## (2) 訓練途中

作業課題の訓練を行う中で、当初はゲーム感覚で取り組んでおりましたが、自分では納得のいかないミスを繰り返し、徐々に真剣に取り組み始めました。

しかしながら、自分の障害については、「仕方ないと理屈では分かるけれども、やっぱり納得はいかない！」という発言をされていました。

## (3) 障害の受容を促した出来事

復帰プロ開始当初、小グループで作業課題の訓練を実施しているときに、Bさんは他の利用者に対して「自分では自分の高次脳機能障害は見えないし、分からないので気付いたら教えてほしい」とお願いするほど理解できていませんでした。そこで、他の利用者や障害者職業カウンセラーからも気付いたところを伝えたところ、Bさんはこれらの指摘を受け入れ、認めるようになりました。

作業課題だけではなく、日常生活上の出来事や訓練中の出来事、本人の気持ちについても相談を頻繁に行い、徐々に障害を理解し受け入れる状況が見られました。

復帰プロの担当職員だけではなく、年齢的に親子ほどの違いのあるAさんやCさんのような年上の利用者から話を聞く機会があり、アドバイスを受けることができた影響も大きかったと思われます。

## 4. 職業センターでの訓練終了時点でのBさんの障害理解・受容について

最終的に、Bさんは、自分の障害について、自分が好きな車に例えて理解されました。

Aさんの障害に関する言い換えを聞いた上で、Bさんは、「それは車にも当てはまります」と説明してくれました。

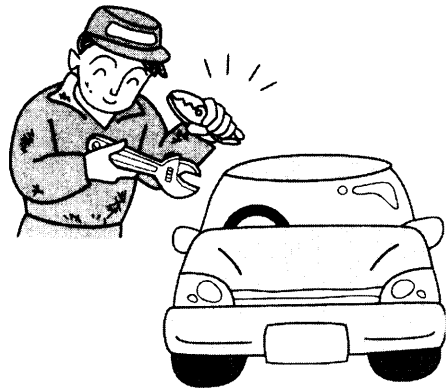
Bさんは注意障害が目立つ方でした。データ入力などをしていくと、時々ミスをし、その間違いの内容はランダムで、左半側無視など一貫したもので

はありませんでした。脳の疲労の影響もあったことは間違いありませんが、ご本人はどうしてミスをしてしまうのか分からず、長く悩んでおられました。

最終的には、どうしてミスが発生するのか、「それは脳の中のことなので、考えても分からない。しかし、それが自分の高次脳機能障害なのではないか」と理解するに至ったのです。その言い換えた表現が、車のCPU(電子制御部品で様々な電子機器に指示を与え、快適なドライブを可能とするもの)=脳でありました。

最近の自動車は以前に比べ電子部品を多く使用しており、電子制御による速度調整などが可能となり、快適に運転ができるようになっていきます。一方で、精密機器が多く使用されているために、運転操作上の不具合が生じると、すぐに改善することは難しく、電気系統のチェックをして、車種に応じた不良箇所のパーツ交換などすることが必要になります。こうしたことが発生しないように、定期的な点検整備を欠かさずに行なっておくことは、快適な運転を行なう上において大切であることを現しているのだと思います。性能を過信しすぎて日常の点検を怠ると、ストップランプの消灯やブレーキ不良などにより、大きな事故を引き起こす原因ともなります。

脳はそのパーツを取り替えることができませんし、なおさら日常点検が重要になってくるのです。だからAさんは、仕事の上で失敗しないためには、メモリーノートを確認して、正しい手順と正しい補完行動をとること、定期的に休憩をとるなど、補完手段や補完行動、対処行動の重要さに気付きました。



この説明で興味深い点は、①CPUにはどうして誤作動を起こしてしまうのか予測ができない、つまり脳の障害は原因を考えることよりも、どう補完行動をとるか考えることが重要であるということ、②日常点検ということ、



毎朝作業前に作業手順の確認とミスしやすい点をふりかえることで、脳に気をつけなくてはならない、という警告を発し続けることの重要性を示唆している点だと思われます。

## 5. Bさんの補完手段、対処行動について

Bさんは、職場復帰直後は「見なくても大丈夫だ」と考え、メモリーノートを十分に見ないため、ミスをしてしまう経験を繰り返してしまいましたが、以後その誤りに気づき、現在では、主体的にメモリーノートを使用しています。

また、がんばってやり続けるといけない、という意識が強かったBさんは、がんばって仕事をやりつづけてしまい、自分の想像以上に脳が疲労してしまうなど、職業センターで味わった失敗を再度経験し、自分の疲労との付き合い方についても考えて行動するようになりました。

Bさんは、どうして障害者になったのか、という思いを100%拭い去ることはできないものの、毎日同じ職務の繰り返しであっても自分の障害の現れ方の傾向と対策をしっかりと考え、気をつけて過ごし、見直しや確認を行うことで障害に対する適切な補完行動をとるようになりました。

### 【[事例3] Cさんの場合】

<Cさんのことば>

脳の障害がどうして起きるのか、考えても仕方がない。脳の中のことは見えないから分からない。

不安はあるけれど、気をつけてやっていくしかない。なんとかなるさ、ケセラセラです。

障害は常に現れるわけではないし、感情コントロールも周囲から指摘されたことを素直に受け入れていくしかない。あとは、大事なメモリーノートに何でもしっかり書き込んで忘れないようにしていきます。

#### 1. 主な障害状況

身体障害者手帳は交付申請をされましたが、取得できなかったとのことです。しかし、視野の欠損があり、眼振・斜視・複視がありました。

主な高次脳機能障害としては、注意障害、遂行機能障害、感情の抑制面が指摘されていました。

#### 2. 復帰プロ利用前の本人の状況

##### (1) 家族から得られた本人の状況

奥様から伺った状況では、以前に比べ、時々、子どものように我慢ができなくなることがある。話がまとまりなく長くなる傾向にあり、冗談なのか本気なのか、周囲が分からなくなる。どのように関わっていけばいいのか不安であるとの気持ちを述べられておられました。

##### (2) 本人の障害理解の状況

本人が最も障害と感じていたことは、「斜視・複視があり、午後になると見えにくくなる」「自分では認めたくないが、妻から感情のコントロールが

悪くなったと指摘された」「以前と比べて文章を読んでもすぐに理解できなかったり、文字を思い出せない」「臨機応変な対応ができなくなった」という状況でした。

### 3. 復帰プロ実施期間中の経過

#### (1) 開始時点

職業センターにいる間は「職員や周囲の人達にお世話になっているので、『はいはい』と何でも言うことを聞いて乗り切ろう」と考えておられました。

#### (2) 訓練途中

ミスをしてもし休憩せずに頑張ってやり続けていれば大丈夫だ、という姿勢が開始からしばらくは続いていました。作業でミスが発生するようになり、認知障害や疲れやすさに言及すると、「認めたくないけど、認めないといけない」「以前はできたことができなくなったということを自分が認めないといけない」といった発言をするようになられました。しかし、自分自身の自尊心もあり、「元の職場に戻るのは、つらい」という発言も聞かれました。

#### (3) 障害の受容を促した出来事

他の利用者であるAさん、Bさん、Kさんとの会話の機会も多くなり、自分だけではなく、他の人も同じように悩んでいることを実感され、徐々に障害に向き合う様子がうかがえました。

### 4. 職業センターでの訓練終了時点でのCさんの障害理解・受容について

Cさんは、作業課題の訓練に慎重に取り組み、ほとんどミスをすることはありませんでした。しかしながら、2, 3日に1度、見直しをしてもなおミスをしてしまうのか分からない経験を通して、「どうしてミスをしてしまうのだろうか」と悩んでも仕方ないし、それは目に見えない脳の中の問題だから、という心境に至っておられました。

Cさんは、冒頭にあるように、高次脳機能障害＝見えない障害であることをよく理解され、考えても仕方ない、なんとかなるさ(ケセラセラ)、と述べ

られたのです。それではどうするべきか、ということで補完行動についてCさんはよく考えるようになられました。

## 5. Cさんの補完手段、対処行動について

Cさんは、メモリーノートを活用するようになって、不安にならず計画的に行動できる快適さをよく理解されるようになりました。そのため、職場復帰後も日記帳の機能もかねて、メモリーノートを活用されています。

また、Cさんは、自分の感情抑制の障害について、大きな不安を感じながら職場復帰されました。職場復帰にあたり、「感情抑制がきかない状態になったら、その時点の記憶は保持されにくい傾向があることを伝え、自分の家族だけではなく、周囲の人にも自分の感情抑制面の障害を伝えましょう、自分が落ち着いたら、相手から不快に感じたことを伝えてもらい、それをメモリーノートに書き溜め、振り返ることにより傾向と対策をつかみ、危ないな、と感じたら徐々に対処行動をとれるようにしましょう」と話し合い、そのことを実践しておられます。

職業センターでプログラムを受けているときは、感情の抑制がきかなくなる事態は生じなかったのですが、ご家族にも事業所にもこの点はお伝えし、協力体制を講じたところでした。

こうしてCさんは、ミスなく仕事をするだけでなく、自律的に行動するツールとしてメモリーノートを使いこなすようになりました。

## 【[事例4] Dさんの場合】

<Dさんのことば>

アメフトは11人でやるスポーツだけれども、今の自分の障害は人数が常に足りない状態で、ポジションから突然人がいなくなるし、いない場所がいつも変わってしまう状態である。だから自分の脳はミスもしやすいし、一つのことに集中すると、他のことは忘れてたり、見落としをしやすい。そのため、常に油断なく何事にも取り組んでいこうと思う。

### 1. 主な障害状況

起立位を保つことが困難な体幹機能障害として身体障害者手帳2級を取得されています。四肢麻痺、構音障害、両上肢巧緻動作障害、立位・歩行バランスの不安定さがあります。

主な高次脳機能障害としては、軽度の注意障害が指摘されていました。

### 2. 復帰プロ利用前の本人の状況

Dさんは、「立位起動性の障害、運動機能障害については分かる。少し忘れっぽくなったが、これ以外は自覚がない」「努力して頑張ってやりつづければ大丈夫だ」という意識でした。

### 3. 復帰プロ実施期間中の経過

#### (1) 開始時点

他の人には自分の障害について、知られたくないし、誰とも関わりたくないという状況でありました。

#### (2) 訓練途中

同時期にEさん、Fさんと作業課題の訓練を受け、同じように作業でのミスが発生し、どうしたらよいのか考える中で、頑なだったDさんに、徐々

にはありますが、復帰プロを受けている人だけには自分の障害について分かってもらいたい、という心境の変化がみられました。

### (3) 障害の受容を促した出来事

Dさんは、同時期に復帰プロを受講された方々と一緒に作業課題の訓練を受けられ、話し合い、悩みを共有することにより、障害を受容していかれました。もちろん、作業課題の訓練により障害の現れ方の傾向と対策を理解していったことも大きいのですが、そのことについて自分で乗り越えることができたのは、ひとりひとりが課題に向けて前向きに取り組み、共に仲間意識を持ち、励ましあってきたことが重要でありました。

また、Dさんは、その後、自分の過去の姿を振り返り、新たに復帰プロを受講することになった方々に対して、助言をしたり励ましたりすることにより、自分自身の障害受容をさらに促し補完手段と適切な補完行動を自分自身で自律的にとれるようになっただけでなく、同時期に職業準備訓練を受講された方々に対して障害受容を促したことも同様に重要でありました。

## 4. 職業センターでの訓練終了時点でのDさんの障害理解・受容について

Dさんは自分の障害について、文頭に載せてある表現のように、学生時代にやっていたアメリカンフットボールに例えて言い換えるようになりました。

Dさんの高次脳機能障害は、軽度の注意障害のため、作業をしてもミスの発生がとても少なく、そのミスの内容も一貫した傾向はありませんでした。そのため、Dさんは自分の障害について、次のように理解されました。

どのポジションから突然選手がいなくなるかわからないし、そもそも選手の人数が足りない。だから、いつミスが発生するのもかわからないし、どのようなミスをしてしまうのかもわからない。だから、そのことを自覚して行動をしていく必要がある、と。

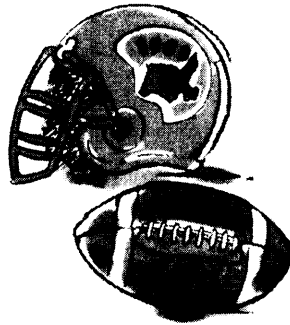


## 5. Dさんの補完手段、対処行動について

Dさんは、受障前の自分と今の自分を比べ、自分は受障前よりもっと人付き合いが悪かったし無愛想だったけれど、今の自分は人のありがたさが理解できるようになり、少しは人付き合いがよくなったかな、ということをよくおっしゃっていました。

Dさんはこちらに来た当初は、自分の安全を省みず、怪我をしてしまうこともありましたが、それ以降注意深く行動すること、人の言うことを素直に聞き入れる姿勢を身につけました。

Dさん自身がそのような指摘を受けたことをメモリーノートに書き留め、定期的に振り返ることにより、自分はどのような時に失敗をしやすいのか、その傾向と対策を自ら把握し、適切な行動をとろうとしていたことが、こちらが予測しなかった補完行動をとれるようになったことにつながったのだと思います。



## 【 [事例5] Eさんの場合】

<Eさんのことば>

自分の障害は、シャッター速度もピントも自動的に選択する一眼レフカメラに例えてみるならば、自分の場合は、スイッチを押すだけで確かに写真をとることはできる。しかし、絞りの調整もピントもあわせることが自動的に正確にできなくなっているの、注意して操作しないとイケなくなっている。露出計を使うことにより、写真を上手にとることができるように、自分自身の補完手段を考え使用しないとイケない。

### 1. 主な障害状況

言語機能の障害により身体障害者手帳4級の、また右手指の機能障害により7級の身体障害者手帳を取得され、医療機関において、失語症、記憶障害、注意の配分、左右失認などに高次脳機能障害があると、診断されていました。

### 2. 復帰プロ利用前の本人の状況

ご本人は、「すぐに完全に治る障害ではない」「言葉が出てこない」など、ご自分の障害についてかなり自覚されていましたが、その反面「もとに戻す事はできないのか」と考えておられました。

### 3. 復帰プロ実施期間中の経過

#### (1) 開始時点

自分の障害について一定理解できていましたが、実際の作業場面において、障害そのものが、どのように作業の失敗となって現れてくるのか、十分理解できていない状態でした。



## (2) 訓練途中

作業課題の簡易版（テスト版）を一部地域センターで実施していたこともあり、大きなミスは発生することはありませんでした。しかしながら、1、2日に1ヶ所でもミスしてしまうことに、おかしいな、と感じられ、このことが高次脳機能障害なんだ、と理解していく状況がありました。

コミュニケーションについては、作業課題における指導をとおして、周囲の人にどのように自分の障害について理解を得て、接してもらったらよいか、相談・整理していくことになりました。

## (3) 障害の受容を促した出来事

訓練途中で、自分が思いもしないミスが無くならない経験をとおして、ずいぶん悩んでおられました。そのようなとき、休みの日に奥様と娘さんが上京され、一緒に家族で出かけたことを契機に、頑張らなくてはいけない、という意識も高まったことも大きな要因でした。

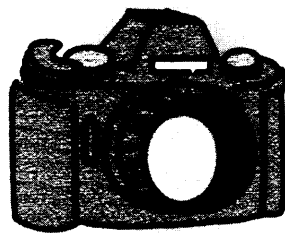
## 4. 職業センターでの訓練終了時点でのEさんの障害理解・受容について

Eさんは、高次脳機能障害となり、考えがすぐにまとまらないこと、質問をされても言葉の意味をすぐには理解できないこと、話したことを思い出しでも言葉にならないことをとても悩んでおられました。

Eさんはこのような状態を冒頭のように、自分の趣味であるカメラに例えられました。受障前は当たり前にかたがたできなくなった苦しみをよく言い表した例えです。

こちらでの訓練を受けている間にも、休日には一人で写真を撮りに外出することもありました。かつては考えなくても当たり前にかたがたできていたことが、できなくなったのはご自身にとって大変辛いことであると思

いますが、障害のことを意識して毎日過ごしていれば、メモリーノートを活かして十分がんばっていけること、そして何よりも家族のために頑張ろう、と努力されたEさんでした。



Eさんは、周囲に自分の障害について理解してもらう必要性について痛感され、その努力も怠ることなく、日々を過ごしておられます。

## 5. Eさんの補完手段、対処行動について

Eさんは、受障前は事務的な仕事についておられましたが、その仕事柄、何回も見直しをすることを苦痛とは思っていなかったもので、訓練中も見直しをしっかりとる必要性を自覚し、行動できるようになりました。

また、Eさんは思い出せないこと、忘れてしまうことにとっても苦しんでいたもので、メモリーノートに1日あったことを何でも書き込み、それを読み返すことにより、記憶を補完していきました。

Eさんは職場復帰にあたり、電話対応の内容やその日に会った人などを忘れないようにするには、メモリーノートの活用が重要であると考え、より綿密に記録をとるようにされました。これにより、他の人が覚えていないことまでもきっちりと記録をとり、周囲に迷惑をかけず、他の人の役に立てるようになりました。

また、一緒に働く人に迷惑をかけたくないという気持ちも強くお持ちでした。このため、周囲の人々にあらかじめ「一度にたくさんの指示を出さないこと」、「大切なことはメモにして渡してもらいたいこと」等をお願いし、協力していただくこととし、このことが、彼の職場復帰をうまく支えていると思われま

## 【〔事例6〕 Fさんの場合】

<Fさんのことば>

自分の体や脳が以前と同じように治ってほしいと思うこともある。けれど、今は自分ができることは何でも挑戦し、仕事を続け頑張っていきたい。

### 1. 主な障害状況

身体機能面は、左半身不随で身体障害者手帳1級を取得されている。左視野同名半盲がある。

主な高次脳機能障害として、記憶障害、記憶力の低下があり、左半側無視、作業速度の低下、注意の配分にやや問題がある。

### 2. 復帰プロ利用前の本人の状況

#### (1) 家族から得られた本人の状況

身体機能面については、両親もよく理解しておられました。しかし、本人の記憶障害については、病院で説明を聞かれたとのことでしたが、十分理解されておらず、ご本人と同様の認識状況でありました。

#### (2) 本人の障害理解の状況

「左半身不随、視野欠損については分かる。忘れっぽくなったくらいで、それ以外に障害を感じ、困ることはない」と捉えられており、「記憶がよくなれば、あとは大丈夫だ」という認識の状況でありました。

### 3. 復帰プロ実施期間中の経過

#### (1) 開始時点

実際のところ、高次脳機能障害については分からない、自分は左半身不随だけだ、という発言が多くありました。

#### (2) 訓練途中

何か失敗しても、忘れてしまっても、「すみません」、「でも大丈夫です」と明るく笑ってすます状況であり、また、メモリーノートの使用についてもなかなか定着しない状況が続きました。

そのため、メモリーノートをきちんと使用しないと困るという経験の都度、意識的に使うように指導を積み重ねました。その結果、徐々に本人も自分には記憶の障害があるので、メモリーノートをきちんと使わないといけない、という発言が聞かれるようになりました。

### (3) 障害の受容を促した出来事

Dさん、Eさんとともに、朝礼の時に、テーマを決め、交代で発表するカリキュラムを設定し、他の二人の話を聞いたり自分でも自分の家族や障害について発表する中で、障害の受容がすすんでいきました。Dさん、Eさんの発表を聞くことにより、「自分でもこうしないといけないと思った」「これからこうしたいと思っている」という主体的な発言とともに、障害受容が始まっていきました。

## 4. 職業センターでの訓練終了時点でのFさんの障害理解・受容について

Fさんは、身体機能面も高次脳機能障害も元通りに治ってほしい、という気持ちを持ち続けていました。しかしながら、治って欲しいけれども、今は自分が何をすべきか、職場復帰に向けてどうすべきか、それを考えるのが重要な問題だという考えに至った発言が冒頭に書いたことばです。

## 5. Fさんの補完手段、対処行動について

周囲の人たちはFさんが記憶障害のため困っているだろう、と思っていても、当のご本人は性格的な明るさもあり、あまり困っていないという状況でした。

そのため、メモリーノートを参照し計画的に行動する訓練において、メモリーノートによって不自由さを解消する経験を積みませようと計画的に取り組んだのですが、十分に活用するところまでいきませんでした。

このため、結果的に職場復帰後も、メモリーノートの活用が疎かになるという状態に陥ったのですが、幸い会社の同僚、上司がメモリーノートの有効

性・重要性をしっかりと理解して下さっていたため、周囲の支えにより職場復帰後もメモリーノートの使用は定着し、職場復帰も順調にすすんでいます。

今後の目標として、よりいっそう記憶障害について自覚してもらい、自律的に行動するようになることが私たち支援者の当面の目標だと思っております。

## 【[事例7] Gさんの場合】

<Gさんのことば>

自分は学生時代に卓球をしていました。

自分は身体障害から、卓球をできなくなったと思っていましたが、例え身体障害がなくても、自分は以前のように卓球はできません。高次脳機能障害のため、とっさの判断ができないので、負けてしまうと思います。

### 1. 主な障害状況

身体機能面は、左上肢機能全廃（2級）、左下肢機能全廃（3級）。左片麻痺、右眼の右視野、左眼の右視野と左上視野に狭窄あり。

主な高次脳機能障害としては、記憶障害、遂行機能障害、注意の配分の問題があり、緊張した場面になると笑ってしまうことがありました。

### 2. 復帰プロ利用前の本人の状況

病院でのリハビリ中であり、病院内での生活に不自由は感じていなかったため、身体機能面の障害は気になるけれど、高次脳機能障害のため具体的に困っていることはあまり認識できていない状況でした。

### 3. 復帰プロ実施期間中の本人の経過

#### (1) 開始時点

Gさんは、開始当初はこちらでの生活になかなか慣れず、親しく話す人が身近にいないことから、指導する職員や同じ復帰プロ利用者に冗談を言ったり、何かきっかけを作って気を引こうという様子が頻繁に見られ、他の利用者から嫌がられることがありました。徐々に慣れてくるに従い、遊びに来ているのではない、という自覚を十分持つように、職員からしばしば注意を受けるようになりました。

## (2) 訓練途中

これまで苦勞をかけたお父さんのためにも、職場復帰をして、お父さんに親孝行をしたい、と前向きな発言をするようになりました。

ギャグが好きなGさんは、「OK牧場です」など、ややふざけた発言をするのですが、そういう時には決まって、作業課題の訓練でミスをするという経験を積み重ね、自分自身が油断しているとき、リラックスしているときは失敗しやすいのだということを理解し始めました。

また、休憩をとる必要性についても徐々に理解し自発的な行動をとることが可能になってきました。

## (3) 障害の受容を促した出来事

性格的に人懐っこいGさんは、みんなと何かをすることを望んでいました。職業センターに来て、一人で行動することが多く、「さみしい」とよく語っていました。そんな時、Dさんが「一緒に休みの日に出かけましょう」と誘ってくれ、Dさん、Gさんと一緒に映画を見に行きました。

それ以降、GさんはDさんのよい点に気づき、認めるようになりました。そして、Dさんの態度・行動について、カウンセラーと話し合うことを通して、今度は自分の高次脳機能障害についても考えるようになりました。

## 4. 職業センターでの訓練終了時点でのGさんの障害理解・受容について

Gさんは、自分の身体障害にも関わらず、以前と同じようにスノーボードをやるつもりです、何でもできますよ、と発言することがしばしばありました。しかしながら、Dさんと一緒に復帰プロを受けている中で、Dさんが身体障害だけではなく、自らの高次脳機能障害をととても慎重に受け止め、行動していることが気になり始めました。

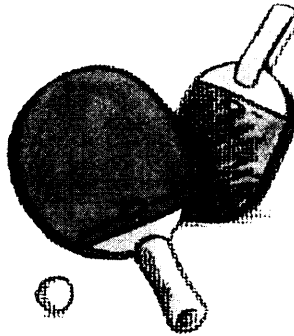
復帰プロの朝礼などでDさん、Hさん、Iさんと交互にテーマに従い発表を聞く中で、自分の高次脳機能障害について受け入れ始め、深く考えるようになりました。それが、冒頭のことばです。卓球は、自分は左手が使えないのでサーブが打てなくなったと思っていたけれど、例え左手が受障前と同じように使えたとしても、高次脳機能障害のため作戦を練りながら試合をすることができなくなったので、勝つことができなくなった、と自発的に話をす

るようになりました。

## 5. Gさんの補完手段、対処行動について

Gさんは、メモリーノートを補完手段として活用しています。作業の上では、ミスした内容を書き溜め、定期的なふりかえることで、同じミスをしないよう、気をつける意識を高めました。

緊張した場面で笑ってしまう点についても、他の人が不愉快に感じ、結果的に人間関係の悪化が生じてしまう可能性があるため、これを防ぐにはどうしたらよいか、復帰プロを通し、整理しました。その結果、疲労により同じ状況であっても笑わないのに、午後疲れがひどくなると笑ってしまうことを確認しました。そのため、適度な休憩時間をとること、疲れをためないように日常生活を気をつけることで対処行動をとれるようになりました。





## 【〔事例8〕 Hさんの場合】

<Hさんのことば>

自分の一番の障害は、記憶障害です。メモをとることが大切だと分かっているのですが、メモをとることができないことがあります。自分で書かなくても大丈夫だ、忘れるはずがないと思いこんでいるのだと思います。

二番目の障害は自分から何かをしようとする気持ちが以前よりなくなってしまうことです。臆病になった自分に気付きました。

私は自分自身の障害について認めなくてはいけないのだと思います。

### 1. 主な障害状況

身体機能面は、両上肢軽度の機能障害（6級）、右視野の狭窄あり。

主な高次脳機能障害としては、重度の記憶障害、その影響による注意の配分に問題あり、軽度の右半側無視、遂行機能の低下、易疲労性。

### 2. 復帰プロ利用前の本人の状況

#### （1）家族から得られた本人の状況

家族は本人の障害についてよく理解しており、日常生活の上では道順を覚えることができないため、職業センターまで迷わないで、行くことができるよう道順書などを作成しました。

受障前に比べ、活発さがなくなり、受身でいることが増えたとのことでした。

#### （2）本人自身の障害理解の状況

病院でのリハビリで、記憶障害についてよく理解されていましたが、実際の仕事になると、どの程度困るのか分からない状況でした。病院でのリ

ハビリを終了し、自宅に戻ったものの、記憶障害のため忘れてしまう不安が強く残っている状況でした。

### 3. 復帰プロ実施期間中の本人の経過

#### (1) 開始時点

Hさんは、記憶障害のためメモをとる必要性を自覚しており、システム手帳を使用していましたが、その手帳では用途に応じ書き分けることが難しい状況がありましたし、整理して書いたものを見る習慣の確立が不十分であったので、相談の上、メモリーノートの導入訓練を行うこととしました。

#### (2) 訓練途中

毎日、メモリーノートのスケジュールや職業センター内での道順などを通所のバスの中でも必死になって確認をし、覚えることのできない不安と忘れてしまうことの不安と必死に向き合っておられました。

メモリーノートをきちんと見て行動できるようになっても払拭しきれない不安を語られることがありましたが、相談を通じて、メモリーノートがあるから、見たら絶対に間違わないし忘れることもない、覚えることができるのだ、と発想を切り替えることができるようになっていきました。

#### (3) 障害の受容を促した出来事

復帰プロという、同じ目的で頑張っている利用者との交流を通し、自分で自分の障害を認めないといけないと思う、と述べるようになりました。過去に復帰プロを受けた人たちの話ももちろんですが、一緒に頑張りましょう、と励ましあうことにより、Hさんは乗り越えることができたように感じます。

また、メモリーノート活用の徹底が図られたのは、ご主人とご家族の支えが大きかったと思われます。Iさんは、職業センターまで片道1時間半以上かけて通所していたのですが、最初の頃はご主人がこちらまでの地図を作ったり、駅まで着いたらご主人やご家族に電話連絡するなど、温かい支援を続けられました。こうした家族の支えにより、通所ができるようになるほか、いろいろな課題がこなせるなどの成功体験により、徐々に自信

をつけられました。

#### 4. 復帰プロ現時点でのHさんの障害理解・受容について

Hさんは、現時点では復帰プロを受講継続中です。冒頭のような発言は、ご自身の障害を受容し、その先どうするのか考えなくては、という意志の現れだと私たちは受け止めました。

もちろんHさんは、作業の手順書を作成し、それに従い注意深く作業をすれば、確実にミスなく作業ができる、という自信を持ち始め、頑張ろう、という発言もしばしば聞くことができるようになりました。

#### 5. Hさんの補完手段、対処行動について

Hさんの記憶障害に対する補完手段は、間違いなくメモリーノートです。

どのような時でも、作業をするたびに毎日、きちんと手順書を確認して行うことが、作業ミスの発生を防いでいるHさんの見事な補完行動であると思われまます。

また、Hさんは自分の記憶障害の大変さから、メモリーノート以外のものにメモをしてしまうと、メモしたことを忘れてしまうことから、何事も基本はメモリーノートに記入していくこと、メモリーノート以外のものに資料などを挟み込んだら、そのこともメモリーノートに書き込み忘れずに行動できるようにになりました。Hさんのこの話は、メモリーノートに全ての情報を集中し、自分の行動管理をしていくことの重要性を気づかせてくれた事例だと言えます。

## V 参考資料

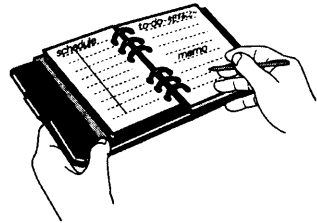
### 1. 補完手段について

補完手段とは、記憶障害、注意障害などの障害によって生じる職業や生活上の問題を軽減したりするための様々な方法のことです。

ここでは、主として職業上の補完手段について取り上げます。

#### (1) メモリーノート

記憶障害のリハビリテーションは、記憶機能の回復を目指すというより、ご本人と家族が日常的な記憶障害について理解し、それによる問題を管理し、トラブルを回避したり、記憶を補完することを手助けすることにあるとされています。



職業センターの利用者に対しては、この記憶を補完する目的で、メモリーノート訓練を実施しています。

#### ①メモリーノートの目的

- ・自分のスケジュール（予定）を管理する（スケジュールリング）
- ・自分の行動を管理・記録する（行動記録）
- ・情報を支援者等と共有する（情報の共有化）
- ・自律的に行動できるようにする

#### ②メモリーノートの内訳（ページの種類）

- ・スケジュール、今日の to-do
- ・to-do-list
- ・重要メモ

#### ③メモリーノートへの記入の仕方（書き分けるキーワード）

- ・schedule：“予定” 「〇月〇日の予定です」
- ・to-do ～今日すること～：“今日のうち（〇時まで）に”
- ・to-do-list：“～まで” 「〇月〇日までに\*\*\*をしてください」
- ・重要メモ：“重要なこと”「これは重要なことなので、書いてください」

(2) 円滑に作業を遂行するための工夫(チェックシート)

注意障害の症状の一つとして、作業した結果について確認を怠ってしまうことから、作業ミスが発見できずに、指示された業務がうまく遂行できない場合があります。こうした状況を改善するための対策として、自分のミスし易い箇所を再度見直し、チェックする方法をとることがあります。

下の図に示した例は、鉄道の保線区の運行管理に関する申請書の記載内容が適切に記入されているか目で確認するとともに、口頭で復唱することにより、ミスの発生を防ぐ工夫を行なった事例です。

同日作業内容のチェックシート(10月17日)

月日	駅間	作業種別	作業内容	実施者	備考
11/17		37K480 ~ 38K180	上 道閉塞正		
11/17		29K760 ~ 30K110	下 PC板水交換		トコリ
11/17		35K70 ~ 38K170	下 道床交換		トコリ
11/17		42K10 ~ 42K260	上 道床換地の作業		トコリ
11/17		40K600 ~ 41K0	下 道床換地の作業		トコリ
11/17		39K600 ~ 39K760	上下 PC板水交換		トコリ
11/17		35K50 ~ 35K550	上 軌条運搬		トコリ
11/17		30K610 ~ 40K110	上 軌条運搬		トコリ
11/17		37K840 ~ 37K890	下 道床換地の作業		トコリ
11/17		20K180 ~ 20K650	下 道床換地の作業		トコリ
11/17		40K630 ~ 40K880	下 軌条運搬		トコリ
11/17		19K100 ~ 19K550	上 PC板水交換		トコリ
11/17		42K90 ~ 42K590	上下 PC板水交換		トコリ
11/17		31K810 ~ 32K210	上下 道床換地の作業		トコリ
11/17		41K450 ~ 41K550	上下 道閉塞正		トコリ
11/17		42K90 ~ 42K340	下 道床交換		トコリ
11/17		22K270 ~ 22K770	下 道閉塞正		トコリ
11/17		18K220 ~ 18K520	上 道床換地の作業		トコリ

検索しながら転記する

(図2)

申請書 申請日

**線路閉鎖申請書**

運輸部長 課

A7 [ ] 訂正

作 業 種 別	人 員 名 氏
行 動 時 間	行 日 月 年
駅 間 及 上 下 線 別	閉 鎖 区 間
場 所 (※閉鎖区間の詳細を記載)	閉 鎖 区 間
所 在 者 姓 名 職 名	分 区
部 門 (承認事項)	資格 電 話 モーターカー執照: 1級持
記 事	

必ず書く欄をここに

上記のとおり申請いたします。

鉄道局 承認 記入

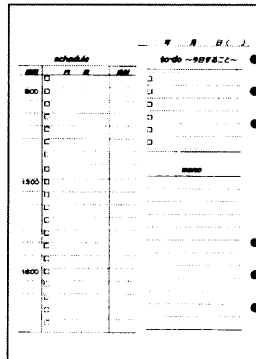
行 動 区 間 記入

区 画	備 考

## 2. トータルパッケージについて

トータルパッケージとは、「職場適応促進のためのトータルパッケージ」として、障害者職業総合センター研究部門で開発中のツールです。これは、職業リハビリテーション・サービスを実施する際に必要となる、作業の遂行能力の向上や補完手段・対処行動等の獲得を目指し、障害状況に応じたセルフマネジメントの構築の視点に立ち、評価や指導・支援が行われるように構成されたものです。トータルパッケージの主たる目的は、職場適応を図る上で、課題となりうる障害状況を、対象者自身と支援者が明確に把握し、それらを乗り越えるための補完手段を確立することにあります。

トータルパッケージでは、高次脳機能障害等の障害のある方々の障害状況に関する情報や障害理解・障害受容の状況を把握すると共に、職場や作業を行なう中で生じがちなストレスや疲労の現れ方等についての情報を収集することから始めます。これらの情報を「M-ストレス・疲労アセスメントシート」に集約した上で、スケジューリング・スキルの獲得が職業リハビリテーション・サービスの中で必要とされるかどうかを判断します。次に、スケジューリング・スキルの獲得が必要な場合には、メモリーノートの訓練を実施します。



さらに、作業評価課題（簡易版）により各種作業課題を体験していただき、作業における障害の現れ方や作業に対する個々人の実行の可能性等について把握していきます。その後、ご本人に適切と考えられる作業課題（訓練版）を選定し、個々の作業課題における作業能力の向上や作業の遂行に必要な環境設定を特定できるように指導及び支援を行います。段階

的な指導・支援により作業をスムーズに遂行できた段階で、複数の作業をご自分でマネジメントできるように支援を行なうものです。

参考資料：障害者職業総合センター調査研究報告書

「精神障害者等を中心とする職業リハビリテーション技法に関する総合的研究(最終報告)」

—トータルパッケージ編—，—実践事例編—

2004年刊行予定

障害者職業総合センター職業センター 実践報告書 NO. 13

～障害の知識と理解の促進シリーズ～

高次脳機能障害を理解するために

事例集

---

編集・発行 独立行政法人 高齢・障害者雇用支援機構  
障害者職業総合センター職業センター  
〒261-0014 千葉県美浜区若葉3丁目1-3  
電話 043-297-9043  
URL <http://www.jeed.or.jp>

発行日 平成16年3月



**NIVR**